

「悲しみの原点に立ち返って」

2016年02月22日

2011年3月11日に未曾有の東日本大震災が襲った。2万人近くの方が亡くなられた。私は2012年4月に2泊3日、友人の牧師に岩手、宮城、福島の子の災害地を案内してもらった。テレビで観て衝撃を受けたが、実際に行き見て、災害の大きさに圧倒され言葉を失った。報道された色々な場面の現場を直接見て、今もその風景が脳裏にはっきり残っている。中でも、石巻市の大川小学校の惨劇に涙した。校舎の後ろに山がある。学校の右手に北上川を見下ろす高台がある。そこに、子どもたちを誘導したらしい。遡上してきた津波は高台を飲み込み、78人の生徒のうち74人、11人の先生のうち10人、スクールバスの運転手も亡くなった。私は高台に立ったが、川の水がここまで来るだろうかと思えるほどの高さがあった。今もインターネットで津波の様子を見ることができる。彼らは恐怖の中、飲み込まれて命を奪われた。校庭に築かれた祭壇の前でしばらく黙祷を捧げた。

岩波書店の月刊誌『世界』の3月号に、産経新聞社東北総局編集委員の伊藤寿行氏と宮城学院女子大学名誉教授で宗教人類学者の山形孝夫氏の「悲しみの原点に立ち返って」と題した対談を掲載している。3・11の災害で家族を失った人々の悲しみをテーマにした対談である。悲しみはまず、怒りをもたらす。なぜ、自分はその人を助けられなかったのかと、自分自身への怒りである。3人の子どもを亡くした夫婦は物凄い夫婦喧嘩をした。なぜ、あの時あなたはこうしなかったのかと責め合う喧嘩である。悲しみのあまり怒りを相手にぶっつけ合う。そうせざるを得ないのである。大川小学校は遺族が裁判を起こしているが、なぜ、子どもを助けることができた裏山に避難させなかったのかと怒りの言葉が飛び交う。悲しみを怒りで解消しようと必死になるのである。

二人の対談は、死者との語り合いが必要ではないかと言う。妻と娘と息子の3人を失い自分だけが生き残った若い父親は、妻と娘の遺体は見つけたが、息子の遺体が見つからない。仕事を止め、息子の遺体を探し歩いた。すると、風の中に「お父さん、ぼくは出ていけないからね」という息子の声を聞いた。「ぼくが出ていけば、お父さんはそこで死ぬ気でしょう」と言われていることに、ハッと気づいた。息子の声を聞き、中断された家族の人生の分まで生きようという思いになったという。亡くなった娘の夢をしばしば見る母親は夢の中で、娘が台所仕事をしている自分の背中に「お母さん」と言って抱きついてきた。そのふにやっとした感覚が背中に残っているという。死者と対話する。それは死者との和解である。和解を見出した時、新しい道が開ける。

私も家族を見送ってきた。津波で一瞬にして失ったのではないので、語らいの時が再三与えられた。しかし、悲しみに変わりはない。私は家族を想い語り、死を受容していった。それが和解であろう。牧師として、多くの方々ともお別れしてきた。お別れする悲しみの原点は深化していくのではないか。その深化について、山形氏は下記のように語っている。「人間の経験の中で悲しみという一つの感情がどのように深まっていくかが重要なことです。そのことは口に出さなくとも、相手には分かるのです。そういう仕方で人間関係は成り立っている。それには、もとになっている悲しみの経験がとても重要な働きをしている。私はそれがすべての宗教の原点だとさえ思っています。悲しみの経験を深めていくと、そこから悲しみとは違うやさしさが噴きだしてくる。」優しさが噴き出してくるような、悲しみを心に秘められたら、どんなに人生が豊かになるであろうか。主イエスの十字架と復活は、このドラマチックな変容を私たちに約束している。